

### 三人の詩人をめぐって

—オーデン、イエイツ、ステイヴンズ—

増谷 外世嗣

How can we know the dance from the dancer?

どうして踊り子とその踊りを区別できよう?

わずか一行の引用では、この踊り子か、ダンサーに、「伊豆の踊り子」を聯想されようと、「明けりヤダンサーの涙雨」のそれを聯想されようと、いたし方もないともいえる。イエイツの劇中で鷹の舞踊をした日本の舞踊家、伊藤道郎であったとも、詩人、芸術家をふくめての踊る人であるとも、何れでもよろしい。ただイエイツが英語で dancer という場合と、翻訳者の私がダンサーという場合とは、その言葉が客観的に背負い出してくる

イメージや舞台は忽ち違ってくるだろう。

詩は精神的風土である。といえば、どうとも解釈できるようである。何の、と問いかけるかも知れない。その詩人の育った国の風土か、或いはその詩人の精神的風景か、と問いかける精神に、今は敢て何も冠せない、と答えておこう。

私の頭の中には今、オーデン、イエイツ、ステイヴンズと三人の詩人がいる。特別にこれらの三人の間に特殊な因果関係があるというわけではない。現代英詩の中で、たまたま私の好きな三人が、それぞれ、イギリス詩人、アイルランド詩人、アメリカ詩人であったことが、私のとりあげたことに重要な意味を与えたこと、そして

逆にこれらの詩人達が、その国を越えて現代英詩の中で特徴ある詩人として取扱われていることなどがあずかっているだろうが、同一言語圏にありながら、彼らそれぞれの個性を通して表現されたものが、今は、それぞれの——その国のか、その人のか、とは区別し得ない——それぞれの風土を具顕していることを痛感しているからである。

オーデンが、スペイン戦争から第二次大戦へ、ヨーロッパからアメリカへ、イェイツがアイルランド独立運動の中で、イギリス、フランス、アメリカへ、ステイヴンズも又、殆んどアメリカ全土からヨーロッパ各地を、それぞれ異なった意味においてではあるが、或る意味では自己探索か世界認識のために、祖国から外への旅路をその精神遍歴としてもっている。そこから生まれた作品が、争い、死、空白、暗黒などの、国を越え、自己を越えた、現代世界をかかえつつも、それぞれの詩人がそれぞれの作品の中に祖国を背負わされている。各自分有せざるを得ない祖国からの脱出でありながら、尚且、祖国批判であり、その祖国を分有せざるを得ない自己批判である。自己の存在場所を現代という共通の罪業の場、国

境なき戦場ともいうべき場所に移していること自体、祖国脱出と祖国分有を織りなしていることをふまえてである。

: earth takes charge of,

Soil accepts for a perious purpose

The jettisoned blood of jokes and dreams,

Making buds from bone, from brains the good

Vague vegetable.

(The Age of Anxiety)

冗談言ったり、夢見たりする血が

捨てられて それを大地が拾い、

土が或る目的のためにそれを受け入れ、

骨から蕾を、脳味噌から野菜を生み出す。

これはスペイン戦争に加わった頃から長く続いてきたオーデンの世界である。この冗談の血を流しながら、第二次大戦で、オーデンは大西洋の裁きの庭に立つ。

The insensible ocean,

Miles without mind, moaned all around our

Limited laughter, and below our songs

Were deaf deeps, dense unaffection,

.....

They swallowed and sank, ceased thereafter

To appear in public; exposed to snap

Verdicts of sharks, to vague inquiries

Of amoeboid monsters,

無感覚な大洋、

精神なき里程が 私たちの狭い笑いをとりまいて

うめいた。私たちの歌声の下に

啞の海底、無情の砂丘があった。

.....

彼らは海に吞まれ沈み、

人前から姿を消し、ふかの咬みつく

裁断に、アミーバのモンスターの詮索に

さらされて行った。

この世界捕捉と共に織り成されている自己分析、His

pure I must give account of and greet his Me.) というような自己分析が世界捕捉と織りなす綾か、有機的結合に出会うと、妙な現象が私の中におこるのである。それは、こういういわば西欧近代的な自己分析が、——オーデンの場合特にフロイドが入ってくるが——主観的純粹自我だとか客観的の自己というような、まだ作られて百年もたない日本語の抽象概念に移し得るものだろうかということである。

移して悪いというのではなく、それを移し得る場とは、観念を移入する作業の場ではなく、私のものとして踊る、舞踊、となってくる生活の場があるだろうか、ということである。オーデンの言葉、英語そのままの具顕が背負い内在させている精神的風土が、私の中に奥深くある言葉、日本語の言葉の背負ってきた風土で受けとめ、踊れるだろうか。勿論、厳密に言ってしまうえば、何もオーデンと私、或は自己分析の問題に限らず、I, my, me という言葉自体からして、言語の本質的相違からくる一般的な問題に還元されてしまうことである。だが、一応この一般的な疑念はおさえて、芸術的舞踊に参加するものとして、オーデンのこの「不安の時代」のドラマと舞踊

の中に、オーデンの世界が自己捕捉と私が一応交り踊り得たとして出発して行った過程から、この作品の終結近く、開示されてくる宗教的世界に辿りつくこと、私の舞踊がはたととまり始める。私の言葉の感覚が宗教感覚が、そのオーデンの宗教感覚にとどかないのである。オーデンのそれがごまかしだなどは毛頭思わぬ。この宗教的舞踊はオーデンの中に、そこに至るまでの他の踊りと共に共存し、その中に内在していたはずである。すると、それらの中にも既に私をはじめていたものがあるはずである。私の捕捉をのがれていた刻みの深さは、「一語」一語にあったはずである。私はそれを見極めねばならない欲望に長くかられてきた。

しばらくでも西欧を私の中に内在させてみることに、特にイギリス、アメリカの日常生活の内側へ入ることは厳密な意味では不可能であっても、その言葉、——国際英語などという英語ではなくて、イギリス人、アメリカ人のマザー・タングとしての言葉——文学作品、或は美術を通して、彼等の伝統の中へ自己投入してみることに——この私の海外留学の意図は先ずうらぎられたらというてよい。わずか一年間であったという滞在期間の長短の問題

ではなく、その努力を重ね、アメリカ大陸、イングランド、地中海へと歩をのばせばのばすほど、いわば古いヨーロッパへと近づくにつれて、それらからはじかれて行く私、逆に、その私の中に巣くっている日本列島の昔か伝統に、それまでは思いもしなかった私の深い底から呼びかけられてきた私であった。私の中に長く深く沈澱していたものが、それを無視してきたか、見ないふりをしてきたその復讐か裁きを与えているような気さえしてきた。

‘Are you Christian?’

と聞かれて、

‘No, I am Buddhist.’

と答えることの意味——如何にも答えになっているようであるが、実はそうではないことに気づいたときの寒々とした目覚め。‘Are you Christian?’ といわば ‘Are you civilized?’ という問にも等しいので、「私達同胞の共通の秩序の中に住む人間なのか」と問うているのである。‘No.’ と答えることで「世界が違います」と答えていることになっているのである。civilizationを文明開花と解釈してきた私の中にある明治か大正に思いあたら

され、且は、仏教も東洋も、私の中には混沌か日常としてあるだけで、西欧に対して説明するだけの術を持たない私の無知もさることながら、彼らにとって東洋が如何に彼ら自身の秩序か世界からの遠い外縁でしかないことを知らされて、私の中にある東洋はますます沈澱して行ったのである。

ボストン・ミュージアム、大英博物館、ルーブル、ヴァチカンの石と鉄の建築、その中に修まる絵画、彫刻——翼ある天使、釘さされる殉教者の胸に流れる赤い血、白い肌と均整美のマドンナにギリシャ彫刻——これらは私達のものではない。深く硬く烈しく刻まれる西欧の高貴性を描いている冷徹な裁断の線は平仮名と漢字で語れるものではない。平仮名と漢字がそのような線の厳しさを運命的に背負っていないのである。ロンドン塔の獄舎やウォルデンの森が日本語の孤独という情感で語れるものではない。

私達からみれば、同質的な生活模様か風土のヨーロッパの世界にありながら、「モスコウやローマを訪れる骨折り損をするな。自分の国土にミューズの神を呼びもどせ。」と言ったイエイツ、同じような気持でアメリカと

ソ聯から故国へ帰ったウエイン達の気持に追われるようにして、帰国後、私と私達のもの、を確めるべく、京都を訪れた。六波羅蜜寺に修まる空也上人、鬘掛地蔵、夢見地蔵、苔寺、仁和寺——ひらがなの線の中に修まる漠然性の中にひそむ、つつましいけだかさ。言葉、芸術は風土であることを私は痛感した。

林あり、

沼あり、

蒼天あり、

ひとの手にはおもみを感じ、

しづかに純金の亀ねむる、

この光る、

寂しき自然のいたみにたへ、

——萩原朔太郎、「亀」——

光りかがやく掌に、

金の仏ぞおはすなれ。

光りかがやく掌に、

はっと思へば仏なし。

——同、「掌」——

朔太郎の詩の中に、その言葉の芸術の中に、朔太郎の人を感じるとる以前に、私には、その言葉に触発されて、その言葉の秩序が生みだす、われわれの中にある、新しいものと古いものとの葛藤よりは、それらのつながりの織りなす、私の中に内在する伝統を感じる。私の言ったこの国、ないしはこの国にある東洋が輝いているような気がする。私が外国文学者だらうか。抒情とか抒情とか、表現技巧の客観的相関物とか、宗教感とか崇高感とか、批評意識以前に、私という存在、或はそれは私達という存在そのものの織り成している部分を表現して見せてくれているようである。痛いほど正直である。

漱石が英文学者であったことが、その作品にどう表れているか、「三四郎」の中のストレイ・シープに英文学によって近代化された角帽青年漱石を感じるとるよりも、「それから」、「門」をふくむ三部作に表現されている世界に、私は外国文学を読んでもどうにもならなかった東洋人としての漱石を感じとる。それを掘りあてた近

代意識を育てるに英文学は役立ったであろう。彼の書簡によっても、その文体はかなり古いものであっても、彼の人間的意識が、鋭く近代化されていることもいえない。しかし、「則天去私」を、個性からの脱却とか、自然への復帰とか説明しなおすことでは、門戸の開かれない世界か伝統がとりもなおさず自己であることの realization が、それほど明確な表面的意識としてでなくとも、いや表面的に鮮明な意識ではなくて、深い沈澱として働いていたから、英文学者としての漱石があれほど自分の言葉の作品を生み出したともいえるだろう。

漱石の写真から朔太郎の写真をながめると、世は明治から大正へと移る日本の精神史が容貌、風姿にまで感じられるが、「世にも寂しい人格が見知らぬ友を呼び」求め、「仰げばぼうぼうたる白っぽい雲が流れる」山頂に泣く「虫けら」か、「かなしい薄暮になれば労働者にて満員となる東京市中」、「浦かなし女」や「ネギやハキダメのごたごたする大井町」を「浦さびしい心臓」で歩く白い姿の朔太郎を三好達治が語る。詩人の鼓動、言葉、生活、土地が語るものの中に内在している。私がアイランド詩人、イニエツを語り、アメリカ詩人ウオレス、ス

テイヴンズを語る言葉とは、所詮、その言葉の内在化の次元が異っている。

私の英文学批評が所詮は根のない浮草のような空々しい念仏だと自嘲しようというのではない。外国文学の翻訳や洋行に浮身をやつし民衆をたぶらかしていればよろしいと、太宰治の「如是我聞」にきめつけられた外国文学者といわれるほどの一角の存在ではないが、それでも私なりに、英米文学に接するとき、言葉の根本的異質性に妨げられながらも、その表現様式——抒情的であろうと、抒事的であろうと——のなっている情感の密度の濃淡や、作品の本質に到達するまでのその作者自身にとつては無意識的な私との伝統的、文化的コンテキストの違いなどが、その作品の本質に近づこうとする私をいやが上にもどかしく、はじいて行く。ましてやその作品の日本語による批評となると、幾多の矛盾に、直面する。わがものとは異質なものであるが故に、その異質性を、己が地にはつかない言葉で表現して行かねばならない処が、実は異国文学の文学たる所以をつきつめようとする処であろうが、そういう過程の裏腹に、私の中にあるこの東洋か日本か、蕪村であり朔太郎であり、漱石で

あり、太宰である私が深く重く沈澱してくる。ローレンスや、イニイツ、或は、ワーツワースやラムが東洋的、日本的なものに近いようで、時に東洋的自然観や和歌や能で説明されることがある。しかし、それは両者の本質を全く誤解したものである。

「人と作品」というようなテーマが課題としてありながら、私は今、幾人かの詩人や作家を一束にしてあつかっているようで、「人」恐らくはその個人、或は、作家以前か、詩人以前の「人」としての問題を無視しているようであるが、その「人」か「個人」が、つきつめて行く処、その土地か国か風土に還元されて行くもので、その風土の中にある人が持って生まれ、育てられてきた人の相違は、或る風土に芽生えたものの微差であるという意識が強く働いている。浜のまさごの一粒が他のどの一粒でもないそれ独自の一粒である個別性も、砂という普遍性の内在化と共にあるものであるというようなことは、個性か個別は普遍を通して、普遍は個別を通して顕現されるものであるというコールリッチの哲学によって意識化され、理論づけられているが、私は今、普遍と個別のコールリッチの理論や、伝統と個別を位置づけるエ

リオットの理論を私なりに説明か解釈をしようというのではない。はっきり言って、私はコールリッチもエリオットも好まない。自らの中にあるイギリス臭を洗い流したようにすまじすぎている処があるからである。ワーズワースとコールリッチとを並べたとき、ワーズワースの方がイギリスの土地と野性の臭いがする。オーデンとエリオットを並べたとき、オーデンの作品の中には、特に「不安の時代」のようなものの中には、イギリス、アメリカ、アイルランドの地べたをはいまわり、大西洋の海底をもぐってそれに封殺された西と東の声をききとろうとするかのように、我が身に分有せざるを得ない傷心の世界にオーデン自身が懊悩している。エリオットがロンドンの油とどぶを歌っても、そこには、人生や世界を「交合、生誕、死。」とくりあげて他人事よそごとのようすまじこんでいる、たしかに本人自身は触媒ではないエリオットが顔を出してくる。オーデンのアメリカへの脱出は如何としても払い得ないイギリス的なものからの脱出、圧殺されそうな自らである風土からの脱出という感がする。自己実現の自由を奪われそうなほど祖国を身につけたからであるともいえる。エリオットのアメリカからイ

ギリスへの帰化は、アメリカの風土の中に、あってほしくないもの、自らの歴史物語りの根となるもの、matterほしさ、その matter なくしては自己存在の根拠の無さが、いやだったこと、彼は自らのニュー・イングランドのお里の知れることがいやだったのではないかとれる節もある。王侯、貴族、ローマ・カトリックを志向するエリオットの中に私はいろんな計算をよみとらざるを得ない。このエリオットとオーデンの比較の仕方に余りない。一方的な私勝手な戯画化のあることは承知している。しかし、この両者の作品のミクロ的差異でもよし、或はこの両者の祖国脱出の仕方でもよし、イギリス文学の中におけるこの両者の左右両極端の相違が、この両者をイエイツやステイヴンズと並べてみたとき、イエイツと両者、或はステイヴンズと両者との本質的な相違からすると、両詩人が同質の文化、風土、伝統の上に育った詩人で、この両者の個性の相違は、アイルランド人、イエイツ、アメリカ人、ステイヴンズとの個性との相違からすれば微差であることに思いあたられる。

自らの中に奥深く蔵されていたアイルランドを愛し、アイルランドを掘りあてて行ったイエイツが、一方に現

実の民衆の卑俗性を憎みつつも、いわばアイルランドの卑俗性をも分有せざるを得ない自らと闘い、ステイヴンズもアメリカの平原と空気と共に育ったアメリカン・デモクラシーの中に真の想像力は喝れはてて、ホワイト・ハウスからジャクソン像までアメリカ的空想の所産ではないそのアメリカの過去と現在の現実からの分身である自らと闘いつつ、想像力をふりしぼってきた。詩人の自己闘争は、いわば自らの中にある皮層の風土との闘いでもある。

これらの詩人達が英語という同一言語文化圏にありながら、その国の本質的差違をその個性を通じて表現している。又逆に、微視の限りをつくしても自らでしかない個性を通してのみ、その国が民族の深い風土が現れてくる。それらの詩人が、その各々の人でしかない個性、むしろ偉大な個性であることは余りに明白である。そして又、それらの詩人が風土表現か具現として作品をものしているなどと言っているのではない。それらの詩人がどの日記か手紙か紀行よりも、その作品こそ私であると言いきる詩人であろうし、又文学が自己実現の場か器になっている現代の歴史的段階を、古の物語的意識の段階へ

押しかえそうというつもりもない。

ただ、作品による自己実現ということが、現代の人間の画一性を辿る社会的潮流の中での自己の存在主張や、識別意識の段階で、考えられるとき、自己実現のプロセスの進行につれて、皮層な先入主や既成概念に捕縛されている自己を剝奪して行く過程、更に自己探究へと進んで行く過程を見逃しやすすい、ということである。つまり、自己の皮層をはぎとって、探究する先は、self というより what I am である。自己の現実と淵源へ、自己の正直さの極限において近づくことである。そこに姿を現わしてくるものが、われらが生れ、育ち、風土の深層なのである。故郷の姿の変らざる人々の歌声であり、踊りである物語や民謡を、スコットランドのオークニー諸島に育ったエドウィン・ミューアは「詩の自然領域」であるという。ワーズワスやイエイツの詩の生誕の秘密を、人と作品という面から解こうとする批評と共に、故郷の姿の変り果てた産業王国に住む私達はその深い風土の上につきもった幾重かの皮層をはぎとって自己淵源へと辿らねばならぬ羽目にもある。

(一橋大学教授)